

Title	情動判断の日米比較
Author(s)	中村, 真
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1993, 19, p. 41-57
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5886">https://doi.org/10.18910/5886</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 情動判断の日米比較

中村 真

### 序

表情を通じた情動コミュニケーションについての比較文化研究は、これまでその普遍性を強調してきた (e.g., Ekman & Friesen, 1969, 1971; Izard, 1971; Ekman & Oster, 1979; Fridlund, Ekman, & Oster, 1987)。先行研究によると、幸福、悲しみ、怒り、恐れ、驚き、嫌悪、軽蔑という7つの情動の顔面表出とその認知は、文化に普遍的であるといわれている (e.g., Ekman & Friesen, 1986; Ekman et al., 1987; Ekman & Heider, 1988)。

この普遍性についての研究は、情動のコミュニケーションが生得的なプログラムに基づくものであるという仮説を構築するうえで非常に重要なものであるが、同時に、発達の過程を通じて人間がこの情動プログラムの制御を学習していることは明かである。つまり、人間はいつでも感じたままを表情として表出しているのではなく、どのような場面でどのような感情を表出すべきかを学んでいるのである。さらに、この学習が文化というコンテキストの中で生じていることも明かである。この発達の過程において、適切な表出行動についての表示規則 (Ekman, 1972; Ekman & Friesen, 1969, 1975) とともに、他者の表出行動のどのような点に注目すべきかについての解釈のための規則をも身につけていくのである (「情動の教育 (emotional education)」, Buck, 1983)。

最近の研究をみると、情動コミュニケーションにおける文化間の類似性と共にその差異に注目するものもある (cf., Andersen, 1991; Kilbride & Yarczower, 1976, 1980; Matsumoto, 1989, in press: かつては行動主義、文化相対主義の立場から文化間の差異が強調されていた)。例えば、質問紙法を用いた一連の比較文化研究においては (Scherer, Wallbott, Matsumoto, & Kudoh, 1989; Wallbott & Scherer, 1989)、身近な人の死に対して悲しみを感じるといったいくつかの情動の主観的経験における普遍性を支持するような文化間の類似性と共に、文化の特殊性を示す文化間の差異が見いだされている。普遍的特徴が異文化に属する成員同士の理解を促すものである

のに対して、文化差は潜在的に相互に誤解を生む可能性をもっていることを考えると、この差異に注目することは非常に重要である。

文化間の差異をより直接的に研究する手段の一つとして、刺激となる表情に対する尺度評定値を比較することができるだろう (Ekman et al., 1987; Matsumoto & Ekman, 1990; Matsumoto, in press)。Ekman et al. は、情動カテゴリー評定を用いて、情動の顔面表出を撮した写真に対する判断についての比較文化的研究を行った。被験者は、一連の表情スライド（すべてコーカソイド人種の表情）を提示され、その表情がどのような情動を示していると思うかを7つの情動尺度（幸福、悲しみ、怒り、嫌悪、驚き、恐れ、軽蔑）のすべてに評定するように求められた。評定尺度は、「情動が存在しない (0)」、「情動の強度が弱い (1)」から「強度が強い (9)」という10段階で構成されていた。それぞれの表情について、7つの尺度の中で最も強いと評定された情動を分析すると情動の正確な判断は普遍的であるという先行研究の結果を再現していることが分かった。加えて、尺度ごとの評定値を分析することによって、Ekman et al. は評定のパターンには文化差があることを見いだした。特に、自分が外国人の表情を評価していることがはっきりと分かる被験者（日本人も含まれる：アメリカ人等の場合日常的に様々な人種と接しているため、顔を見ただけでその人が外国人かどうかは分からない。）は、「幸福」、「驚き」、「恐れ」の各尺度において有意に低い評定を行ったことが分かった。Ekman et al. はこの結果を、自分と同じ文化に属していない人の表情を判断しなければならない者の不確かさ (uncertainty)、丁寧さ (politeness) を反映したものと解釈している。

アメリカ人と日本人の情動コミュニケーションは全く異質のものと考えられ、その差異についてこれまで繰り返し研究が行われてきた (e.g., Argyle et al., 1986; Ekman & Friesen, 1975; Izard, 1971)。表示規則は、まず、Friesen (1972) の日米比較のデータに基づいて検証された。また、Matsumoto and Ekman (1989) は日米2カ国に焦点を当て、Ekman et al. (1987) の研究を発展させた。Matsumoto and Ekman はポーズした顔面情動表出 (表情) の尺度評定に関して、日本人よりアメリカ人の方が高く評定することを見いだした。例外は、嫌悪の尺度においてのみ日本人の評定が高いというものであった。Matsumoto and Ekman は、この結果をアメリカ人と日本人では個々の文化の中で学習した表示・解読規則の差異を反映していると解釈している。つまり、日本人は公の場面で否定的情動を表出することを禁じる表示規則をもっているので、情動表出の程度を割り引いて見てしまうというのである。

しかし、この解釈には疑問が残る。一般的に日本人が否定的情動の表出を隠し、抑えるような規則をもっているとしたら、どうして情動の程度を割り増すのではなく割り引いたのだろうか。本当の感情が表に出ないことを知っているとなれば、同じ表情を見たときその裏にある情動の強さはより強いと判断するというのが自然な推論なのではないだろうか。Matsumoto and Ekman (1989) においてこの点、つまり、他者の情動経験についての判断を被験者が行っていたかは明かではない。実際、彼らの被験者は、「表出者の情動経験」ではなく「情動表出

の強さ」を評定するように教示されているのであるが、情動の表出と情動経験とはここで扱われる表示・解読規則との関連でいえば明確に区別して研究するべきものである（中村, 1991）。

ところで、表情刺激として動画を用いた比較文化的研究は非常に限られており（e.g., a New Guinea study cited in Ekman & Friesen, 1975; Shimoda, Argyle, & Ricci-Bitti, 1978）、自発的表出行動を研究したものはさらに限られる（e.g., Eibl-Eibesfeldt, 1970）。この研究では、アメリカ人と日本人大学生を被験者として、スライド観察法（the slide viewing paradigm; Buck, 1978）を用いて録画された自発的な表出行動のビデオを刺激として情動の判断を分析した。スライド観察法とは、まず、表出者に一連の情動的内容のスライド（例えば、遊んでいる赤ん坊、火傷をした人、抽象デザイン）を見せ、それに対してどのように感じたかを口頭で述べさせるとともに、隠しカメラを用いて表出者に知られないように表出行動を録画し、次に、判断者がそのビデオを観察し表出者のスライドに対する反応からどのようなスライドを観察していたか等について判断を行い情動のコミュニケーションについて研究しようとする方法である。この方法で用いられたスライドは特定の情動（例えば、幸福、驚き、嫌悪等）を喚起するように意図されたものではないが、そのいくつかははっきりと「快」の反応を引き起こし、また別のものは「不快」を引き起こすことが分かっている。これらのスライドのタイプ（快・中性・不快）は操作的に定義されたものであるが（Nakamura, Buck, & Kenny, 1990）、詳細については方法で説明する。

この研究では被験者に「表出者はどのような情動状態にあると思うか」を判断するように教示し、情動経験の判断を明示的に検討することを目指した。仮説として、日本人は他者の情動状態の判断において情動経験の否定的な側面を強調する、と考えた。その理由は、日本人は否定的情動経験を表出することを抑制するという表示規則をもっており、表情に現れた情動よりも内的な情動経験の方が強いと判断すると思われるからである。

## 方 法

### 【被験者】

アメリカ人被験者は28名（男女半数ずつ）の大学生（University of Connecticut）。日本人被験者は32名（男女半数ずつ）の大学生（大阪大学）。

### 【刺激】

アメリカ人大学生が情動スライドを見ているところを録画したビデオシーン18場面（1場面5秒程度）。表出者は男女各3名で、一人の表出者について快・中性・不快の3場面を用いた。刺激として用いた表出場面は、Wagner, Buck, and Winterbotham (1989) によって録画された232場面のなかから予備実験によって選んだものである（Nakamura et al., 1990; 中村,

1989)。

上述したように、表情ビデオは予備実験の結果に基づいて快・中性・不快の3つのカテゴリーに分類した。快の表出は以下のように定義された。すなわち、「快-不快」、「幸福」尺度（7段階）の平均評定値が4より大きく、否定的情動尺度（悲しみ、恐れ、怒り、嫌悪）に対する平均評定値が4より小さく、肯定的情動尺度と否定的情動尺度に対する平均評定値の差が1ポイント以上ある表出場面。中性の表出は、「快-不快」を除くすべての尺度に対する平均評定値が4より小さく、かつすべての尺度に対する評定値のばらつきが2ポイント以内にあるという条件を満たすもの。不快の表出は、「快-不快」と「幸福」尺度に対する平均評定値が4より小さく、否定的情動尺度に対する平均評定値が4より大きく、肯定的情動尺度と否定的情動尺度に対する平均評定値の差が1ポイント以上のものであった。このような評定値のプロフィールに基づく分類基準に加えて、刺激グループ間の相関と距離の指標についても分析を行い、カテゴリーが妥当であることを確認した (see Nakamura et al.)。

#### 【手続き】

アメリカ人被験者は次のような教示を受けた。表出行動のビデオは「私的状況」で録画された、つまり、表出者が一人でスライドを見ているところを隠しカメラで録画されたと説明を受けた。被験者に18の表出場面を20インチモニターで1場面ずつ提示し、表出者がどのように感じたと思うかを8つの7段階尺度に評定してもらった。8つの尺度は、「快-不快」、「強-弱」、「幸福」、「悲しみ」、「怒り」、「恐れ」、「驚き」、「嫌悪」であった。

日本人被験者については、半数が上述した「私的状況」条件に割り当てられた。残りの半数は表出行動が「公的状況」条件、つまり表出行動は表出者が実験室で実験者とともにスライドを見ているところを目の前においたカメラで録画したものであると説明された。教示以外の実験手続きはアメリカで行われたものと同様であった。

ところで、「状況」についての教示が日米で異なる点は、本研究の操作上の問題になり得るが、Nakamura, Buck, and Kenny (1990) と中村 (1989) によると、状況の操作は表情の評定に有意な効果を及ぼしていないことが分かっており（実際、これらの研究における状況の操作は別の目的のために行われた）、本研究における教示の差異は以下の分析において問題としなかった。

#### 【分析】

3 × 2 × 2の分散分析を行った。独立変数は、表情カテゴリー（快・中性・不快）、国籍（日本・アメリカ）、被験者の性であった。従属変数は、8つの情動尺度のうち「快-不快」、「強-弱」の2つを除く6尺度への評定値である。この6つの尺度を用いたのは、これらが先行研究によって文化に普遍的表情を示す情動であると見なされているからである。

## 結 果

3 要因（表情カテゴリー×国籍×被験者の性）の分散分析を6つの尺度評定値のそれぞれについて行った。Table 1 に分散分析表を示した。表情カテゴリーの主効果は6つの情動尺度のすべてにおいて有意であった。カテゴリーごとの平均評定値を Table 2 に示したが、この結果は表情カテゴリーに応じて組織的に評定値が変化していることを反映している。Scheffe 法によって多重比較を行った結果、「幸福」尺度においては、快の表出が中性よりも高く評定され、中性が不快よりも高く評定された ( $p < .05$ )。「驚き」を除く他のすべての尺度では逆に、快の表出が中性よりも低く評定され、中性が不快よりも低く評定された ( $p < .05$ )。「驚き」尺度においては、不快が快と中性のカテゴリーよりも高く評定された ( $p < .05$ )。

**Table 1 Results of ANOVAs for Ratings of Facial Expressions**

Effect	Scale					
	Happy	Sad	Angry	Afraid	Surprise	Disgust
Simulus Type (A)	510.60***	162.71***	182.55***	192.93***	147.69***	326.82***
Nationality (B)	1.00	9.00**	22.41***	8.38**	3.03	34.83***
Receivers' Sex (C)	5.76*	0.54	0.01	0.29	0.30	0.03
A x B	18.56***	1.49	1.40	1.21	10.58***	11.64***
A x C	3.53*	0.42	3.26*	3.66*	1.61	3.61*
B x C	0.17	0.62	1.17	0.85	7.61**	2.57
A x B x C	1.64	0.03	4.25*	2.39	1.73	3.63*

Note. Degrees of freedom of the effects A, B, C, A x B, A x C, B x C, and A x B x C are  $F(2, 118)$ ,  $F(1, 59)$ ,  $F(1, 59)$ ,  $F(2, 118)$ ,  $F(2, 118)$ ,  $F(1, 59)$ , and  $F(1, 118)$  respectively.  
 \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ .

### 【文化差】

国籍による差異を吟味するため、アメリカ人被験者と日本人被験者のデータのそれぞれについて、2 要因（表情カテゴリー×被験者の性）の分散分析を行ったところ、両国籍の被験者の全ての尺度評定値において表情カテゴリーの主効果が有意であった。F 値の最小値はアメリカ人による驚きの評定 ( $F(2, 54) = 67.95$ ,  $p < .001$ ) で、最大値はアメリカ人の幸福の評定 ( $F(2, 54) = 268.36$ ,  $p < .001$ ) であった。Table 2 に、国別に、幸福、怒り、驚き、嫌悪尺度に対する平均評定値を示した。分散分析と Table 2 の結果を見ると、アメリカ人大学生と日本人大学生

Table 2 Mean Ratings of Expressions by American and Japanese Subjects

Scale	Nationality	Type of Expressions			
		Plea	Neut	Unpl	<u>M</u>
Happy	Americans	5.43	2.83	2.04	3.43
	Japanese	4.89	3.33	2.42	3.55
	<u>M</u>	5.14	3.09	2.24	3.49
Sad	Americans	1.85	3.46	4.14	3.15
	Japanese	2.47	3.67	4.67	3.60
	<u>M</u>	2.18	3.57	4.42	3.39
Angry	Americans	1.76	2.85	4.10	2.90
	Japanese	2.44	3.80	4.67	3.64
	<u>M</u>	2.12	3.36	4.40	3.29
Afraid	Americans	1.81	2.77	4.42	3.00
	Japanese	2.34	3.42	4.68	3.48
	<u>M</u>	2.09	3.11	4.56	3.26
Surprise	Americans	3.44	2.73	5.24	3.80
	Japanese	3.23	3.71	5.33	4.09
	<u>M</u>	3.33	3.26	5.29	3.96
Disgust	Americans	1.77	2.85	5.37	3.33
	Japanese	2.59	4.19	5.48	4.09
	<u>M</u>	2.21	3.57	5.43	3.74

Note. Plea, Neut, and Unpl are Pleasant, Neutral, and Unpleasant respectively.

は表情のカテゴリーに対して類似した評価を与えていることが分かる。つまり、快・中性・不快という3つの表情カテゴリーに対する情動の強さの評定の相対的関係は、2つの国籍の被験者の間で非常に類似していると言えよう。

文化差についてさらに検討するために、上述した3要因の分散分析の結果を吟味すると、国籍の主効果が、悲しみ、怒り、恐れ、嫌悪の4尺度で有意であった ( $F(1, 59)=9.00, 22.41, 8.38, 34.83$  and  $p<.01, .001, .01, .001$  respectively)。これらの主効果は、この4つの情動尺度において日本人被験者がアメリカ人被験者よりも高く評定していることを示している。

また、幸福、驚き、嫌悪の評定においては、表情カテゴリー×国籍の交互作用が有意であった ( $F(2, 118)=18.56, 10.58, 11.64$  respectively;  $p<.001$ )。Table 2 の平均評定値を検討した結果、幸福尺度については、快の表情に対してアメリカ人が日本人より高く評定し ( $F(1, 59)=14.24, p<.001$ )、中性と不快の表情に対しては逆に日本人がアメリカ人より高く評定している ( $F(1, 59)=7.51, 8.18$  respectively;  $p<.001$ ) ことが分かった (Figure 1 参照)。驚き尺度については、快と不快の評定に日米の有意な差はないが、中性の表情に対して日本人がアメリカ人より高く評定していた ( $F(1, 59)=23.83, p<.001$ )。また、嫌悪尺度については、不快の表情については差はないが快と中性に対して日本人被験者がアメリカ人よりも高く評定している ( $F(1, 59)=24.78, 35.70$  respectively;  $p<.001$ ) ことが分かった (Figure 2 参照)。

はじめに報告した4つの尺度における国籍の主効果とともに、これらの表情カテゴリー×国籍の効果(驚きをのぞく)は、日本とアメリカという2つの文化の一貫した差異を反映している。つまり、日本人被験者はアメリカ人被験者と比較して表情をより否定的に評価する傾向がある。言い換えれば、日本人は表情を見たとき表出者の情動状態をより否定的に判断すると言えよう。この解釈は、幸福尺度への評定パターンとも一貫している。つまり、日本人被験者は快の表情に対して幸福の程度をより低く評定している。これらの結果はすべて、日本人がアメリカ人に比べ否定的側面を強調していることを示していると考えられる。

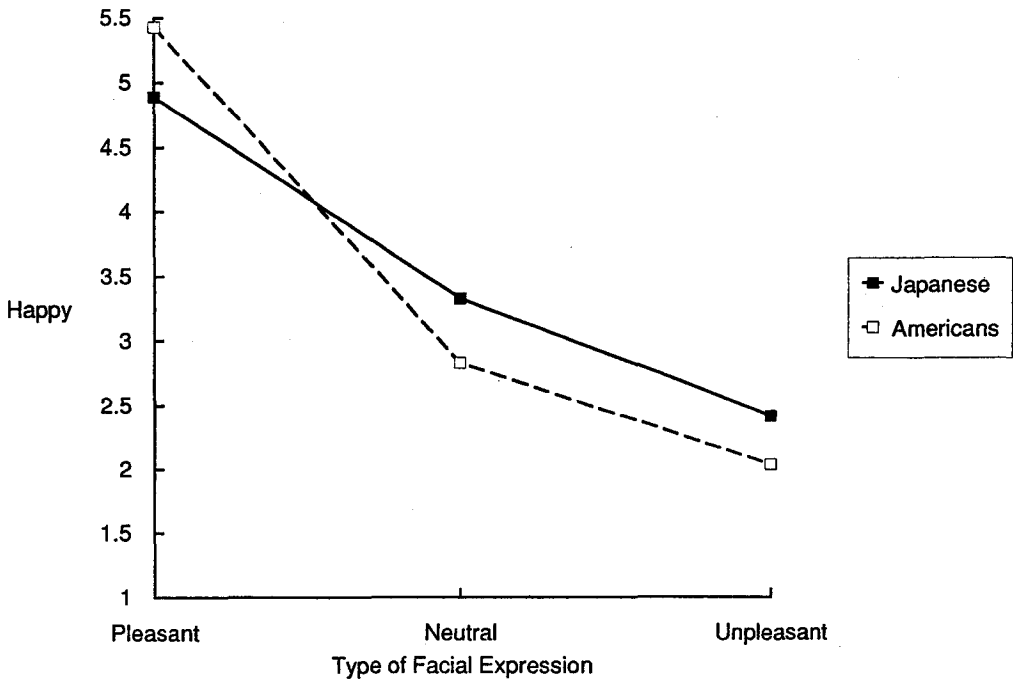


Figure 1 Happy Ratings by Japanese and American Subjects



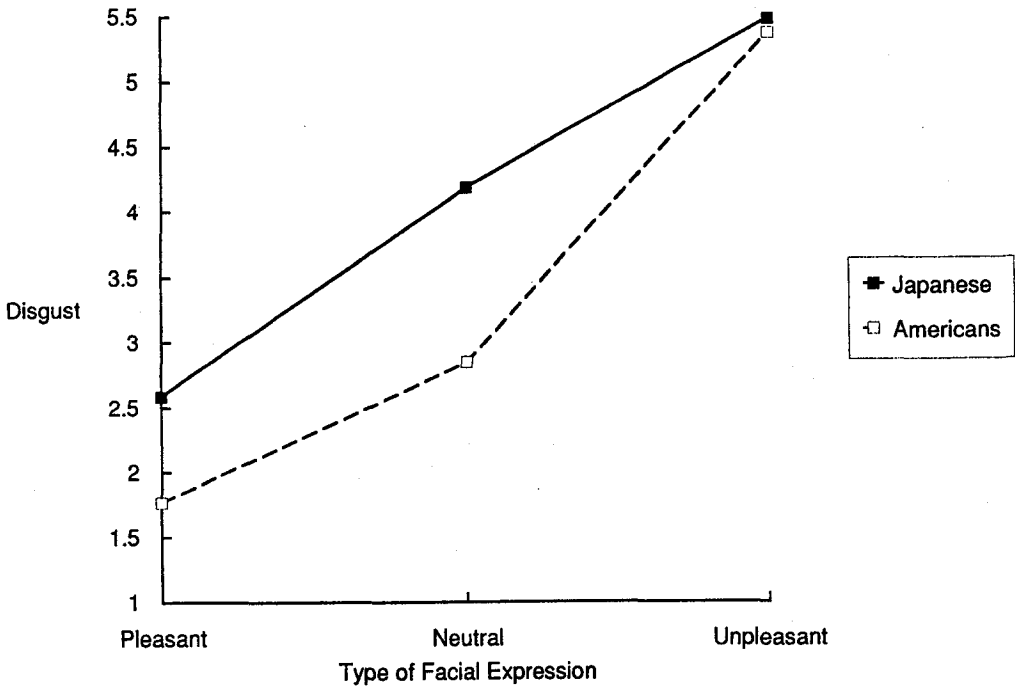


Figure 2 Disgust Ratings by Japanese and American Subjects

### 【性差】

上述した3要因の分散分析の結果を性差について分析した。被験者の性の主効果は幸福尺度において有意であった ( $F(1, 59)=5.76, p<.05$ )。この結果は、男性が女性よりも表情をより幸福と評定していることを反映している ( $F(2, 118)=3.53, p<.05$ )。被験者の性は、また、表情カテゴリーと交互作用しており、幸福尺度において、中性と快の表情についての評定は類似しているが不快の表情に対して女性が男性に比べより低く評定している ( $F(1, 59)=16.96, p<.001$ ) ことを示している (Figure 3 参照)。同様の評定パターンを反映した被験者の性×表情カテゴリーの交互作用が、怒り (Figure 4 参照)、恐れ、嫌悪尺度においても有意であった ( $F(2, 118)=3.26, 3.66, 3.61$  respectively;  $p<.05$ )。Table 3 に被験者の性別に情動尺度への平均評定値を示したが、不快の表情に対して女性被験者は男性被験者と比較して怒り、恐れ、嫌悪尺度により高く評定している ( $F(1, 59)=2.68, 3.18, 3.84$  respectively;  $p<.1$ )。これらの結果をまとめると、女性は男性に比べ不快の表情をより否定的にとらえる傾向があると言えよう。言い換えれば、男性は女性に比べ不快の表出を否定的にとらえる程度が低いようである。

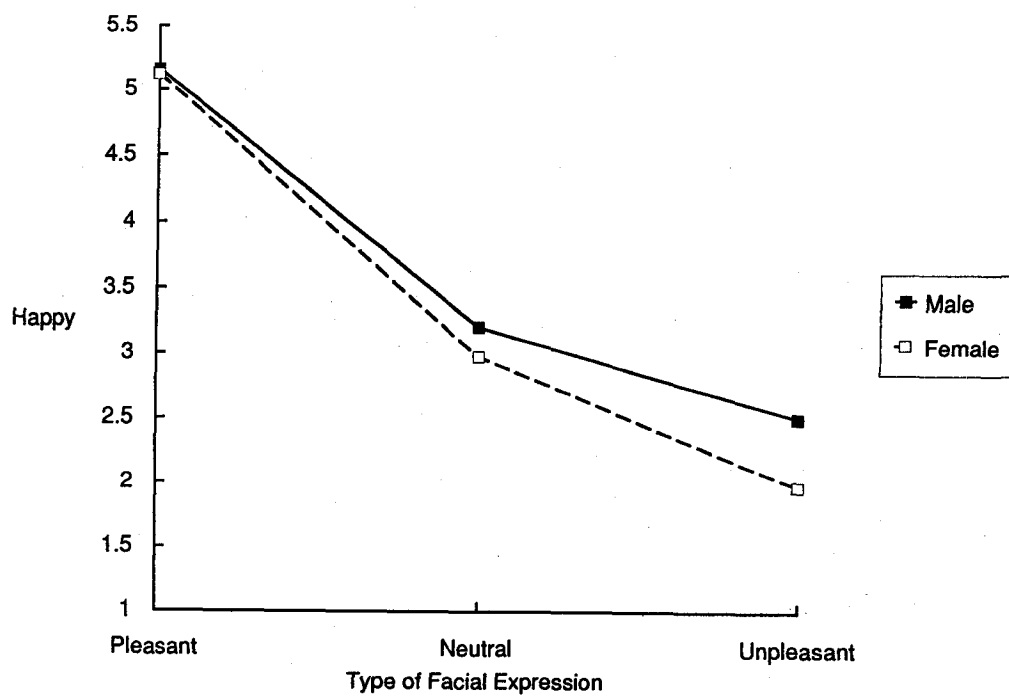


Figure 3 Happy Ratings by Male and Female Subjects

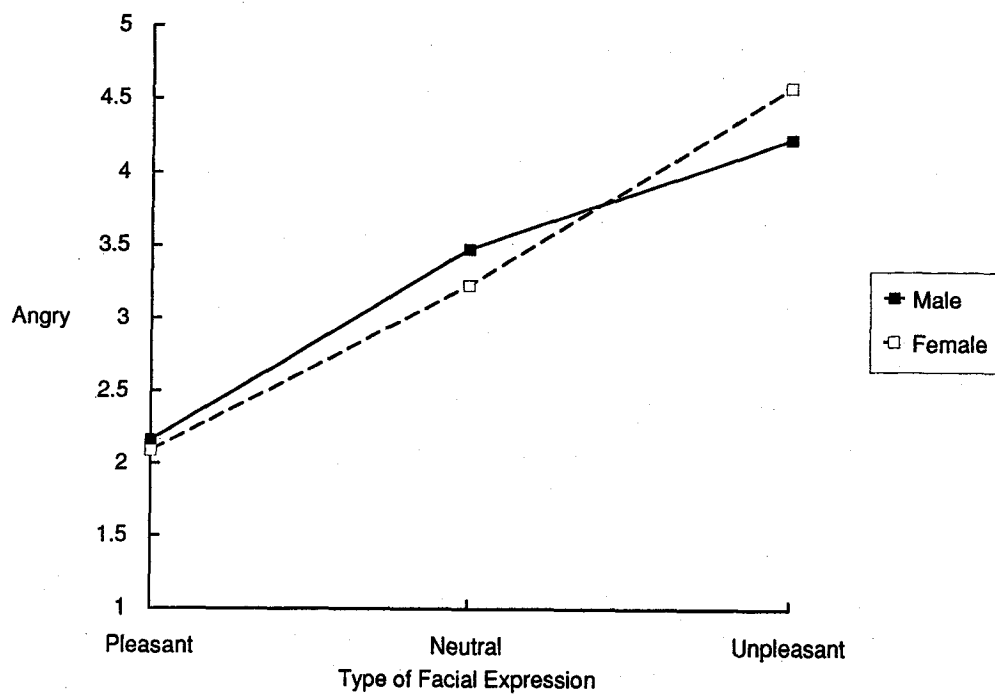


Figure 4 Angry Ratings by Male and Female Subjects

Table 3 Mean Ratings of Expressions by Male and Female Subjects

Scale	Gender	Type of Expressions			
		Plea	Neut	Unpl	M
Happy	Males	5.16	3.21	2.51	3.63
	Females	5.12	2.98	1.98	3.36
Sad	Males	2.19	3.47	4.35	3.34
	Females	2.17	3.68	4.49	3.45
Angry	Males	2.16	3.48	4.23	3.29
	Females	2.09	3.23	4.58	3.30
Afraid	Males	2.15	3.17	4.32	3.21
	Females	2.04	3.06	4.80	3.30
Surprise	Males	3.51	3.25	5.24	4.00
	Females	3.14	3.26	5.33	3.91
Disgust	Males	2.21	3.72	5.24	3.72
	Females	2.21	3.41	5.62	3.75

Note. Plea, Neut, and Unpl are Pleasant, Neutral, and Unpleasant respectively.

文化と性の関係について見ると、被験者の性×国籍の交互作用が驚き尺度において有意であった ( $F(1, 59)=7.61, p<.01$ )。これは、アメリカ人男性がアメリカ人女性に比べ表情をより驚いていると評定する傾向があり ( $F(1, 27)=3.99, p<.06$ )、逆に日本人女性は日本人男性に比べ表情をより驚いていると評定する傾向があったことを反映している ( $F(1, 31)=3.52, p<.07$ )。さらに、被験者の性×国籍×表情カテゴリーの交互作用が怒りと嫌悪の尺度において有意であった ( $F(2, 118)=4.25, 3.63$  respectively;  $p<.05$ )。この交互作用についてさらに分析するため多重比較を行ったが統計的に有意な差は見られなかった。しかし、尺度ごとの平均評定値を男女別、国籍別に吟味すると (Table 4 参照)、日本人女性は3つの表情カテゴリーの全てについて日本人男性よりも高く評定する傾向があり、一方、アメリカ人女性は不快の表情についてはアメリカ人男性よりも高く評定し、中性の表情では低く評定する傾向があるようだ (Figure 5, 6 参照)。

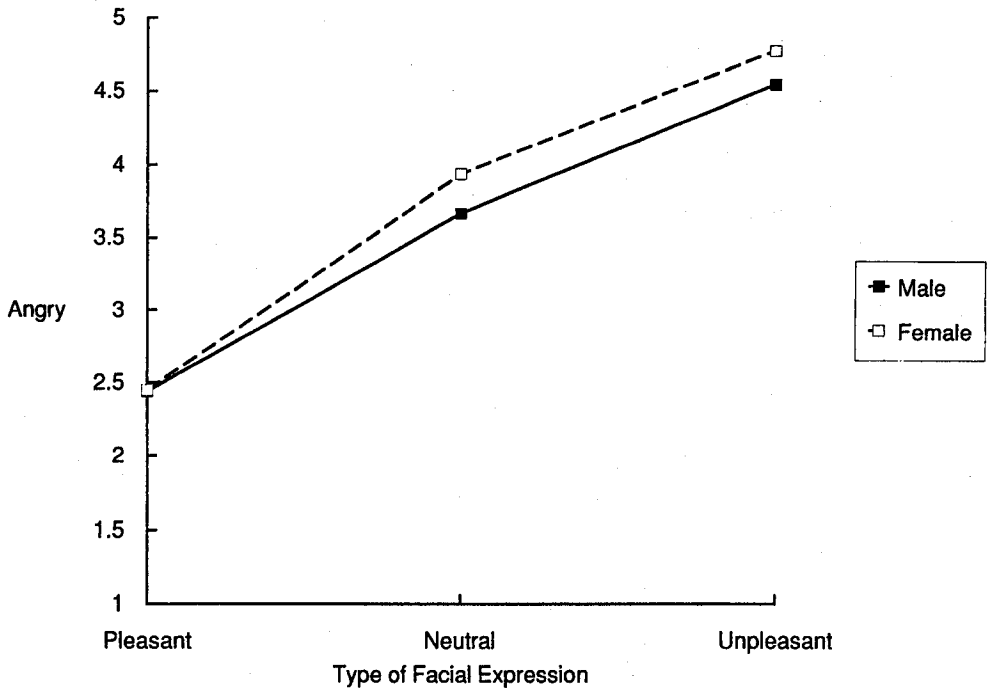


Figure 5 Angry Ratings by Japanese Males and Females

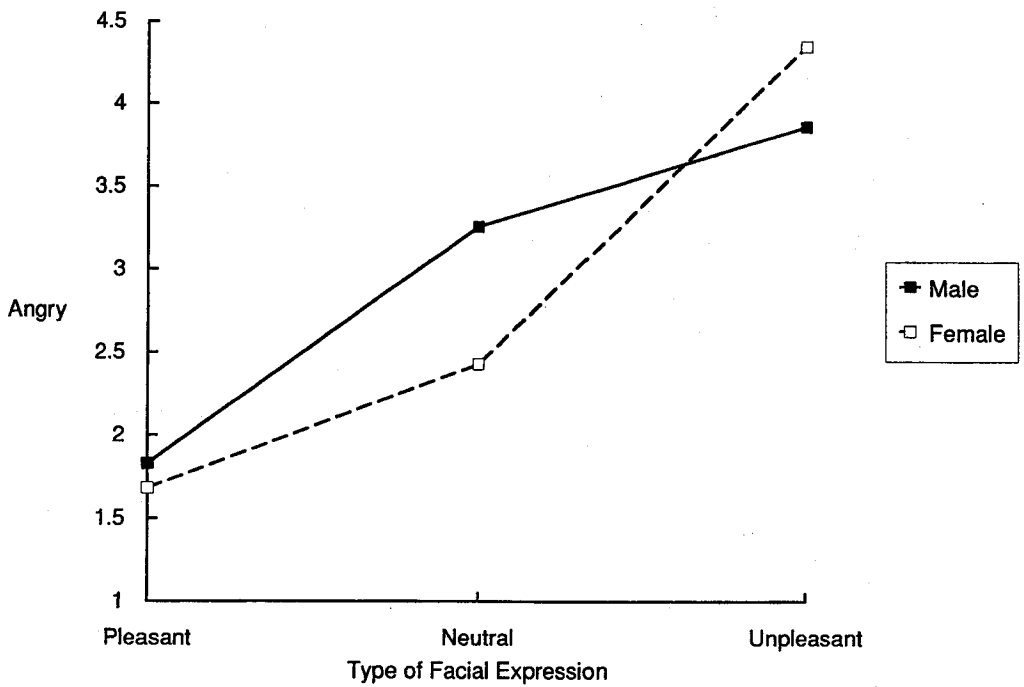


Figure 6 Angry Ratings by American Males and Females

Table 4 Mean Ratings of Expressions by Male and Female in Each Culture

Scale	Nationality	Gender	Type of Expressions			
			Plea	Neut	Unpl	<u>M</u>
Angry	Americans	Males	1.83	3.26	3.86	2.98
		Females	1.68	2.43	4.35	2.82
	Japanese	Males	2.44	3.67	4.55	3.55
		Females	2.45	3.94	4.78	3.72
Disgust	Americans	Males	1.82	3.32	5.14	3.43
		Females	1.71	2.38	5.60	3.23
	Japanese	Males	2.54	4.07	5.33	3.98
		Females	2.65	4.31	5.64	4.20

Note. Plea, Neut, and Unpl are Pleasant, Neutral, and Unpleasant respectively.

## 考 察

### 【文化間の類似性と差異】

基本情動の表出と認知が文化に普遍的であるという先行研究 (e.g., Ekman et al., 1987; Matsumoto & Ekman, 1990) と一貫して、この研究においてもアメリカと日本の被験者が、ビデオ録画された表情を同じように評定していることが分かった。つまり、快の表情については不快の表情と比べ、より幸福で、より否定的でないとして評定している。

しかし同時に日本人とアメリカ人による評定の差異も見いだされた。本研究では、Ekman et al. (1987) や Matsumoto and Ekman (1989) とは反対に、日本人被験者がアメリカ人被験者と比較して表情表出者の情動状態をより否定的に評定していることが分かった。この研究と先行研究とでは方法論的な差異もあり単純に結果を比較することはできないが、表示・解読規則という概念を使った説明については、この研究の結果に適用する方がより適切である。つまり、もし日本人被験者が、否定的な情動を自由に表出することを禁ずるという表示規則をもっているとすると、表出者は自分が実際に感じている否定的情動をそのまま表に出すことはないだろうと推論するだろう。よって、日本人被験者は、表情が表出者の本当の否定的情動を反映していないとすれば、本当の情動は表出されたものより強いと判断すると考えられる。Nakamura, Buck, and Kenny (1990) はこの推論を支持する結果を見いだしている。つまり、真の情動を表出することが抑制されると考えられる場合、抑制されない場合と比較して、表情

の重要性が低く評価されたのである。

ここまで先行研究との相違点について論じてきたが、類似点についても述べておかなければならない。Matsumoto and Ekman (1989) によると、日本人被験者はアメリカ人被験者と比較して幸福の表情の強度をより低く評定し、嫌悪の表情についてはより強く評定する傾向があった。これらの結果はこの研究と一貫していると考えられるし、上述した表示規則による説明にも当てはまる。その他の相違点（例えば、Matsumoto and Ekman の研究では日本人被験者が驚き、怒り、恐れ、悲しみの表出の強度をより低く評定している）について論じるためにはさらに研究を行うことが必要である。

### 【性差】

性差について検討した結果、女性被験者は不快の表情を男性と比較して、より幸福でなく、かつ、より否定的であると知覚しているようである。この結果は、肯定的情動状態と比べ否定的情動の判断において女性被験者が正確であるという Rosenthal, Hall, DiMatteo, Rogers, and Archer (1979) の結果とも一貫している (p.159)。

本研究は正確さについて検討するために行われたわけではないが、ここで少しこの問題について論じてみる。カテゴリー判断の研究において、正確さの測度は被験者の判断におけるフォールス・アラームを考慮していないことが多いので、刺激に対して否定的な判断をする傾向が強ければ、否定的な刺激に対する正確さが増すことになる。例えば、被験者が全ての刺激を否定的であるとカテゴライズしたとすると他のカテゴリーに属する刺激についての正確さは低くても、否定的カテゴリーの正確さは完全なものとなる。しかし、もし女性被験者が不快の表情のみをより否定的に判断するということが一般的な傾向であるならば、これもまた上述したような否定的情動判断の正確さを向上させることとなる。

この2つの説明を検討すると、本研究の結果は、女性の正確さについて後者の説明を支持しているようだ。つまり、女性はやみくもに否定的な評価をするために結果として否定的情動の判断が正確なのではなく、否定的情動表出に敏感であるために正確であると考えられる。情動の非言語的コミュニケーションにおいて女性が男性よりも優れていることはよく報告されているが (e.g., Hall, 1979)、これは否定的表情に対する女性の感受性の高さを反映しているといえよう。

上述した非言語的コミュニケーションにおける女性の優位性については、その論拠のほとんどがアメリカ人被験者を対象とした実験のデータであることを注意しておかねばならない。本研究では、限定された結果であるが日本人女性においても特に不快の表情に対して感受性が強いことが分かった。ある研究者 (Eisenberg & Lennon, 1983; Hall, 1979; Snodgrass, 1985) は共感性や情動の非言語的コミュニケーションにおける女性の優位性はアメリカ社会における女性の相対的に低い地位や役割を反映していると論じているが、このことは日本においても当ては

まるかも知れない。また別の説明としては、女性の社会化の過程においては、達成 (achievement) よりも養育 (nurturance) が重視されるというものもある (Bond, 1988)。発達過程や社会システム、社会における優劣関係などを情動のコミュニケーションと共に比較文化的に研究することによってこの問題についてさらに理解を深めることができるだろう。

## 要約及び結論

情動コミュニケーションについての最近の比較文化的研究の多くは、情動表出の普遍性を強調してきた。しかし、実際のコミュニケーション場面を想定すると、文化間の差異を検討することも重要である。本研究では、日本人大学生とアメリカ人大学生の男女を被験者としてビデオ録画された自発的情動表出に対する情動判断を比較した。日米でそれぞれ1つのサンプルしか用いていないこと、サンプリングの母集団が大学生に限られること、サンプル間でわずかながら方法の違いがあるということは今後解決すべき問題であるが、本研究において以下のことが見いだされた。(a) アメリカ人被験者と比較して日本人被験者の方が情動をより否定的に判断する。(b) 女性被験者（特にアメリカ人）は不快の表情に選択的に感受性が高い。これらの点は情動コミュニケーションにおいて文化的・社会的要因が重要な役割をはたしていることを示唆している。つまり、もし、男性よりも女性の方が非言語的情報の知覚において優れているということが男女間の社会的学習プロセスにおける差異を反映しているのだとしたら、文化と性による差異は社会的学習という同じ視点から分析することが可能となる。今後さらに組織的な研究を続け、これらの点について吟味していく必要がある。

## 謝辞

この研究の一部は、平成4年度文部省科学研究費（課題番号04851022）、（課題番号04236110：代表者・吉川左紀子）の助成を受けた。

## References

- Andersen, P. (1991). Explaining intercultural differences in nonverbal communication. In L. A. Samovar and R. E. Porter (Eds.), *Intercultural Communication: A Reader*, 6th Ed. Belmont, CA: Wadsworth. pp.286-296.
- Argyle, M., Henderson, M., Bond, M., Iizuka, Y., & Contarello, A. (1986). Cross-cultural variations in relationship rules. *International Journal of Psychology*, 21, 287-315.
- Bond, M. H. (1988). Finding universal dimensions of individual variation in multicultural studies of values: The Rokeach and Chinese value surveys. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 1009-1015.
- Buck, R. (1978). The slide-viewing technique for measuring nonverbal sending accuracy: A guide for replication. *Catalog of Selected Documents in Psychology*, 8, p.63.
- Buck, R. (1983). Emotional development and emotional education. In R. Plutchik & H. Kellerman (Eds.), *Emotion in early development*. New York: Academic.
- Buck, R. (1984). *The communication of emotion*. New York: Guilford Press.
- Bull, P. (1983). *Body movement and interpersonal communication*. (Japanese edition. S. Takahashi, Trans.) John Wiley & Sons.
- Eisenberg, N. & Lennon, R. (1983). Sex differences in empathy and related capacities. *Psychological Bulletin*, 94, 100-131.
- Ekman, P. (1972). Universals and cultural differences in facial expressions of emotion. In J. Cole (Ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*, 1971, Vol. 19. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1, 49-98.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1971). Constants across cultures in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, 124-129.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. (Japanese edition. T. Kudoh, Trans.) Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1986). A new pan-cultural facial expression of emotion. *Motivation and Emotion*, 10, 159-168.
- Ekman, P., Friesen, W. V., O'Sullivan, M., Chan, A., Diacoyanni-Tarlatzis, I., Heider, K., Krause, R., LeCompte, W. A., Pitcairn, T. Ricci-Bicci, P. E., Scherer, K., & Tomita, M. (1987). Universals and cultural differences in the judgments of facial expressions of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 712-717.
- Ekman, P. & Heider, K. G. (1988). The universality of a contempt expression: A replication. *Motivation and Emotion*, 12, 303-308.
- Ekman, P. & Oster, H. (1979). Facial expressions of emotion. *Annual Review of Psychology*, 30, 527-554.
- Fridlund, A. J., Ekman, P., & Oster, H. (1987). Facial expressions of emotion: Review of literature, 1970-1983. In A. W. Siegman & S. Feldstein (Eds.) *Nonverbal Behavior and Communication*, 2nd. ed. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Friesen, W. V. (1972). *Cultural differences in facial expressions in a social situation: A experimental test of the concept of display rules*. Unpublished doctoral dissertation. University of California, San Francisco.



- Hall, J. A. (1979). Gender, gender roles, and nonverbal communication skills. In R. Rosenthal (Ed.), *Skills in nonverbal communication*. Cambridge, MA.: Oelgeschlager, Gunn & Hain.
- Izard, C. E. (1971). *Face of emotion*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Kilbride, J. E. & Yarczower, M. (1976). Recognition of happy and sad facial expressions among Bagand and U.S. children. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 7, 181-194.
- Kilbride, J. E. & Yarczower, M. (1980). Recognition and imitation of facial expressions: A cross-cultural comparison between Zambia and the United States. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 11, 281-296.
- Konishi, T., Yasui, M., & Kunihiro, T. (Eds.) (1986). *Shogakukan Progressive English-Japanese Dictionary, 2nd ed.* Tokyo: Shogakukan.
- Matsumoto, D. (1989). Cultural influences on the perception of emotion. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 20 (1), 92-105.
- Matsumoto, D. (in press). American-Japanese cultural differences in the recognition of universal facial expressions. *Journal of Cross-Cultural Psychology*.
- Matsumoto, D. & Ekman, P. (1989). American-Japanese cultural differences in intensity ratings of facial expressions of emotion. *Motivation and Emotion*, 13 (2), 143-157.
- Morsbach, H. (1976). Aspects of nonverbal communication in Japan. In L. A. Samovar and R. E. Porter (Eds.), *Intercultural Communication: A Reader*, 2nd Ed. Belmont, CA: Wadsworth, pp.240-259.
- Nakamura, M. (1991). *Judgments of emotional state of another: A model*. Unpublished manuscript.
- Nakamura, M. (1989). *Relative contributions of expressive behavior and an elicitor in the judgment of emotional state of another: The effect of situational information on Japanese judges*. Unpublished master thesis. Osaka University.
- Nakamura, M., Buck, R., & Kenny, D. A. (1990). Relative contributions of expressive behavior and an elicitor in the judgment of emotional state of another. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 5, 1032-1039.
- Nakane, C. (1973). *Japanese society*. Harmondsworth: Penguin.
- Rosenthal, R., Hall, J. A., DiMatteo, M. R., Rogers, P. L., & Archer, D. (1979). *Sensitivity to nonverbal communication: The PONS test*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Scherer, K., Wallbott, H. G., Matsumoto, D., & Dudoh, T. (1989). Emotional experience in cultural context: A comparison between Europe, Japan, and the United States. In K. R. Scherer (Ed.), *Facets of emotion: Recent research*. New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Shimoda, K., Argyle, M., & Riccibitti, P. (1978). The intercultural recognition of emotional expressions by three national racial groups: English, Italian and Japanese. *European Journal of Social Psychology*, 8, 169-179.
- Snodgrass, S. E. (1985). Women's intuition: The effect of subordinate role on interpersonal sensitivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 146-155.
- Wagner, H., Buck, R., Winterbotham (1989). Unpublished study. University of Connecticut.
- Wallbott, H. G. & Scherer, K. (1989). How universal and specific is emotional experience? Evidence from 27 countries and five continents. In K. R. Scherer (Ed.), *Facets of emotion: Recent research*. New Jersey: Lawrence Erlbaum.



## **Cross-Cultural Differences in Emotion Judgments by American and Japanese College Students**

*Makoto NAKAMURA*

Most cross-cultural studies of the communication of emotion have emphasized the cultural universality of facial expressions. For practical purposes, however, the examination of cross-cultural differences is also important.

Using quantitative measures and scale ratings, we compared the judgments of emotion based upon videotaped spontaneous expressive behavior between American and Japanese, and male and female college students.

When rating all expressive behaviors, it was found that Japanese subjects tended to rate negative emotion scales (sad, angry, afraid, and disgust) to be more negative than did Americans, and that female subjects (especially American females) tended to rate unpleasant expressive behavior to be more negative than did males.

The cultural difference in expression ratings may reflect the differences in the display rules of the two cultures and the gender difference may reflect the relative social status between male and female, in that social subordinates are more sensitive to negative emotional states.